

安堵感から時間の経過と共に変化して行った様子は今でも脳裏に焼きついていきます。

稚内に上陸して引揚援護局の方々から暖かく迎えられ、一泊して翌十月四日上川町の叔父の家へ無事たどり着きました。手元に残った金はほんの僅か、幸い列車は無料の取扱いをしてくれました。当時の六人は現在元気であることを申し添えます。

戦後を生きぬいて

北海道 佐々木 ツワ

祖父母が樺太遠刈村字胡蝶別に住んで終戦の年で四十年ほどになっており、祖父は村の古老として誰からも親しまれていたのをおぼえています。私にとって本当に先祖の地を失ったのです。

八月十五日終戦を知り村中が絶望の極に至り地蔵堂に集まり自決も覚悟し合った。

婦女子と十五歳以下の男子は本州に渡ることと村役場

から連絡があり、食べ物と身の廻りの物を持てるだけ持って村の発動機船に送られて村を出発した。残った男の人達といつまでも声を限りの別れを惜しんだ。私達は傷痍軍人で両眼失明の二十五歳の弟と我が子二人祖母と母と妹達であった。

夕方に大泊港に着き無人になっていた番屋に泊まった。翌日から、朝になると引揚船のくるのを待って人の波に押され混雑の中を波止場に通った。

二十二日午後七時傷痍軍人とその家族を乗せて最後の引揚船となった連絡船に乗船出来た。失明の弟のお陰であった。残った人達は止むなくまた村へ戻っていった。私のすぐ下の妹も家族をつれ帰った。

出港して間もなく空が真っ赤に火の手が見える。真岡の町が焼けているのだと言っていた。船内では火の気は一切禁じられた。タバコも勿論であった。

先頭の船は機雷にふれ、後を走っていた船も沈没させられたと船内ニュースがあり、いつ同じ目に逢うかと全員生きた心地もなかった。ようやく稚内に着いたのは夜中の十二時近かった。木の葉のような船がぞくぞく入港

してくる。自力で脱走した人達でした。

途中で沈んだ舟も随分あったと思います。次第にしけが大きくなって来ていました。

稚内の駅は生地獄というか駅の中から外まで人があふれて立つことも座ることも出来ない有様で失明の弟と祖母子供達を落ち着かせるところを探して人の中を押され、もまれてやっと重なるように座ることが出来た。そこから中に大小便や汚物が散乱して悪臭を放って目をおおう有様であった。

今は樺太の土となっている祖父母に皆の安全を守って下さいと胸の中で祈った。

汽車で札幌に着いたのが二十四日で途中停車する各駅で婦人会の方がおにぎりや弁当を差し入れてくれて本当に有難かった。引揚援護局の人の案内で道庁の池の前でやっとくつろいで座ることが出来た。種々指示をうけ弟は病院にはいった。私達は百八十人くらいが一つの寺に収容された。各寺に分散したのです。寺の納骨堂に一人当り毛布四枚づつもらい寝泊まりした。食事は茶碗にお粥一杯と漬物と味噌汁だけであった。郵便貯金が三

千円あったからそれをおろして代用食を買って食べた。それから毎日食券をもらいに通ったが長い行列をつくって並んでも前列まで品切れの日もあった。

私達の班長をしていた人が横流しをしていてそれでお粥しか出さなかったことがわかり、それから当り前の食事が出るようになった。それでも満足に腹に充たすことは出来なかった。

札幌の月寒で落林檎を引揚者だけに売ってくれる農家を見つければ米袋一杯五円で買ってきて皆栄養失調で歩くのもふらついていたから喜んで食べた。

その内に子供達にハシカが流行し私の男の子も含めて七人が死にました。かなしさと疲労で私も寝込んでしまいい暫くは起き上がることが出来なかった。悪いことが続き入院していた弟も母の必死の看病もむなしく亡くなつた。泣く泣く冥福を祈って日を送った。

二か月が過ぎると各自職を見つけて寺を出なければならなかった。幸い長男が復員して函館にいたので。本当に奇蹟としか言いようがないのですが私の夢の中で函館に居ること、居所も知らせてくれたのです。早速手紙

を出したところ、すぐにお寺へたずねて来た。

叔父の家に寄宿していたといつて叔父の厚意でイカ飯を沢山持ってきてくれ有り難く涙を流しながら腹一杯ご馳走になった、その味がつい最近になっても忘れられない。

それから兵隊仲間で炭焼きの話があり長男もその仲間にはいり家族十二人共々美幌に向かった。美幌の軍人官舎があいていて町役場に入れてくれた。家の廻りに野菜が残っていて食べても良いと言ってくれた。

男達は炭焼きの支度をして飛び回っている間、女の手のすいている者たちは各自農家へ手伝いに行つて食糧を手に入れていた。二十日ほどでアメリカ軍が駐屯することになってその家も出なければならなくなりトラックで小清水に移動し、男達は小屋掛けに山の中に先行し私も妹とそれぞれの下の兎一人つづ連れて山に向かったが途中で日が暮れて農家に泊めてもらった。その農家は気持よく泊めてくれた。翌朝初めて麦ご飯を見た娘はごみが入っていると泣きだして困った。熊が出る山路を心細く歩き、みぞれが降る中や々と辿り着いた。母が先行し

て炊事の支度をしていってくれ粗末なバラック造りながら家族が一室に集まり励まし合つた。

男達は炭焼きを始め、私達も母私妹にもう一家がいて昼は炊事が終わればその頃はもう雪も腰あたりくらいまで降っていたが一生懸命に薪集めをした。

樺太ほどではないが寒気が厳しくて火の気を絶やせなく夜中もドラム缶で造つたストーブを燃やさなければ眠れなかった。炭焼きも手伝いました。昼食は馬鈴薯、夕食はフスマといって麦か燕麦をもみごと粉にしたのではないかと思われる小麦粉のだんご汁で魚の塩漬けた汁を醬油代わりにした。

十二月十二日に夫が樺太から脱走して札幌の寺から息子と弟の骨を持って帰つて来ました。脱走を二度失敗して三度目にやっと成功したのだそうです。

正月すぎで炭売りに町へ出て引揚者に開墾地を払い下げる話を聞き早速願書を出し小清水町神浦に入植が決まった人達五家族もいれてやった。

私は二十二年五月二十九歳になり又一児を産んだ。樺太に一家族だけ取残された妹家族も無事引揚げてきて、

シベリアに抑留されていた弟も戻ってきた。この年に生き残った家族全員が小清水で生活することが出来た。

それぞれに職も得て独立した。私達夫婦も長い間農業をしたが子供達も成長し独立して家を出た。私達も二人だけでの宮農に限界をさとり町に出て働いたがのちに北見に土地を求めて家を建てた。

四十九年九月母は八十六歳で亡くなった。身体の丈夫な母で年を取っても働く事が好きであった。五十年五月妹が稚内にて結婚式に出席した。昼頃に宗谷岬を通り幸いよく晴れていて樺太の知床半島がよく見えた。三十五年ぶりに見る島影に同行の弟も妹も懐かしさのあまり涙が止まらなかった。

今老いて家族と同居して何不自由なく孫に囲まれて楽しいが、やはり母も亡く夫もいまは亡く同じ時代を心身共に苦しみ合い悲しみ合った戦前戦後を思いめぐらし、あれこれと懐かしく回想しております。

引き揚げ前後の苦い思い出

北海道 原田 宏

小さい頃、父に聞いた記憶をたどってみると、父母は、昭和五年の春に渡樺したようだ。昭和十一年三月に母は死亡し、昭和十八年四月には父は再婚した。翌十九年十二月には妹が生まれた。

父は、本斗町にある日本油脂の工場に勤務し、私ども親子は、平凡ながらも、衣食住は不自由なく平和な生活を送っていた。

昭和二十年八月十五日終戦、ついに日本も敗れたんだなあとくやしい思いでいっぱいであった。それから、二三日たって戦闘機が飛来し、鉄道線路ぞいに機銃掃射をしながら飛び去った。家が線路の近くにあったので、生きた心地がしなかった。それから間もなくソ連兵が真岡に上陸し、南下中との噂が流れ、不安な気持ちでいっぱいであった。